

〈生きている〉と実感するのは

中野 理恵

〈生きている〉と実感するのは、どのような時なのだろうか。

『ブータン 山の教室』は、オーストラリアに渡り、ミュージシャンになるのが夢だったブータンの若き教師ウゲンが主人公。バスと、多くの行程を徒歩で8日間もかけて向かうしか方法のない、標高4,800メートルもの秘境にあるブータン北部の村、ルナナの小学校へ赴任するよう告げられる。村から出迎えにやってきた青年ミチヨンと共に、山を歩き、川を越えて到着したルナナでは、村長を筆頭に村人たちが大歓迎だ。だが、最初の授業の日の朝、ドアを開けると、立っていた少女のペムから「学校は8時半から始まるけど、今は9時」と告げられ、初日から大失敗。床の軋む教室は埃だらけで、黒板もない。携帯電話も通じないし、電気もトイレトーパーもなかったのだ。うんざりしながらも、何とか工夫して黒板代わりの板に文字を書き、教え始めると、子どもたちは信頼しきった眼差しで、ウゲンを見つめ勉強に励む。

一方で、ある日見かけた、昼間から泥酔している男性が、実は少女ペムの父親と知り、つぶらな瞳の影に複雑な事情のあることも知った。そして、ふとしたことでヤクの糞が貴重な燃料だと知り、ヤクと共に暮らし始めるウゲンは、次第にルナナの暮らしになじんでゆく。

ヒマラヤの山々に囲まれた大自然と、頬を赤くした子どもたちや、のんびりと草を食むヤク。子どもたちに未来を託す“ゴ”（日本の襦袢の裾を短くしたようなブータンの民族衣装）を着た大人たち。“ルナナ”を受け入れてゆくウゲン。ブータンの豊かさを堪能し、原題の“Lunana : A Yak in the Classroom”をしみじみと味わいたくなる映画であった。



『ブータン 山の教室』より
©2019 ALL RIGHTS RESERVED

掃除婦やバブで働きながら、幼いふたりの女の子を育てる『サンドラの小さな家』の主人公サンドラの私生活は悲惨だった。DV夫に苦しめられていたのだ。耐え切れず、ふたりを連れて家を飛び出し、ホテルで暮らし始めたのだが、職場からは遠く、ガソリン代が週に30ユーロもかかる上に、フロントボーイからは正面から入ると蔑まれ、公営住宅に入居できるのは遥か数年後。そんなある日、35,000ユーロ（日本円で約450万円）で家を建てられるとの情報をインターネットで発見し、「やってみよう」と、決意する。雇い主が裏庭を提供してくれた。サンドラは大工を探し、友人・知人たちに週末に作業してくれと応援を頼み、家が出来上がる。だが、完成パーティで盛り上がっていた時に、とんでもない事態が新築の家で起きていたのだった…。

自力で家を建て始めるサンドラとさして親しくはないのに、協力する人々が週末に集まってくる。気持ちが温かくなるが、DVの根深さを結末に用意している映画製作者の意図の深さに驚く。

《Cinema Information》

『ブータン 山の教室』

ブータン映画(110分)／監督：パオ・チョニン・ドルジ／4月3日より、岩波ホール他にて全国順次公開

『サンドラの小さな家』

アイルランド・イギリス映画(97分)／監督：フィリダ・ロイド／4月2日より、新宿ピカデリー他にて全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』（現代書館、2018）等。